



わたしの心の中にはプロティノス
〔「二七〇五年」新義の創始者〕の一節がある。一者についてだつたと思うが、どこに書かれていたのかも、自分が正確に引用しているかも、もう分からぬ。「誰も、そこを見知らぬ土地のように歩かないだろう。」

I

十字路で、わたしはよく不安を感じたものだ。そんなとき、その場所、あるいはほとんどその場所で、わたしが選択せず、すでに遠ざかつて いるその道をほんの少し行つたところに、そう、より高次な本質の国が開けていたのだという気がするのだ。わたしはそこに行つて生きることもできたはずなのに、それを失つてしまつた。しかしながら、選択する瞬間には、このもう一本の道を行かなければならぬとわたしに教えるものは何もなかつたし、そう示唆するものさえなかつた。わたしはしばしば、それを目で追い、その道が新しい土地に通じてはいな いことを確かめることができた。しかし、それで心が休まるわけではない。というのも、もう一方の国に、想像を絶するような大建造物やすばらしい景観の土地があるわけで

はないだろうことも承知しているからだ。未知の色彩や形態を夢見るのはわたしの好みではないし、この世の美しさを超越することを夢見るのも同様だ。わたしはこの世が好きだし、自分が見るもののがわたしを満たしてくれる。そして、頂上の端正なシルエットや樹々の威厳、谷底を流れる水の快活な様子や教会の建物正面^{フアザード}の優雅さが、ある地方で、ある時間、あまりに強烈なので、それらはまさしく望まれたもの、それもわれわれの善（幸福）のために望まれたものにほかならない、と思うことさえある。この調和には意味がある。これらの風景や形質は、まだこわばつたままで、おそらく魔法にかけられているのだろうが、一つのことばなのだ。われわれの彷徨の末に絶対なるものが現れるためには、目を凝らし、耳を澄ますだけよい。このような見通しのもとでは、したがって、此処^{ヒコ}が約束の場所なのだ。

それにもかかわらず、もう一方の国についての考えがわたしにこのうえなく激しく憑りついて、この世におけるあらゆる幸福をわたしから奪うことになるのは、まさしくわたしがこのような一種の信仰に辿り着いたときである。というのも、この世が一つの文、いやむしろ音楽だ——徴^{シニズム}であると同時に実体でもある——ということを確信すればするほど、その音楽を聴かせてくれるキーのうちの一本が欠けているという感覚が激しくなつてくるからだ。われわれは、この統一性の中で、ばらばらになつていて、行動は本能が予感することのほうに赴いたり帰着したりすることができない。そしてたとえ、オーケストラのこのざわめきの中に一つの声が立ち上り、それが一瞬明瞭に響いたとしても、世紀は過ぎ、語っていた者は死に、語たちの意味は消滅する。それはあたかも、生命の力、色や形態^{フォルム}の統語法の力、自然の永続性によつてた



《リュート奏者のいるバッカス祭》の青色……(p. 11)

えず繰り返される繁茂し虹色に輝く語たちについて、われわれがそのうちのもつとも単純な関係性すら知覚することができないかのようであり、太陽はそのため、輝いているのに黒いのだ。われわれは何故、テラスの縁からするように、存在するものを見下ろすことができきないのだろう？ 実在すること、しかし物たちの表面で、道の曲がり角で、偶然の中ではちがうやり方で。ちょうど生成の中に潜り込み、そこから海藻に被われて、額も肩幅も広くなり、——晴れやかな表情で、われをも忘れ、神々しくなつてふたたび浮上する泳ぎ手のように。しかし、不可能な潜在性がどういうものであるか教えてくれる作品は、たしかにある。プッサン〔一五九四—一六六〇〕の『リュート奏者のいるバッカス祭』の青色には、今にも嵐がやつてきそうな即時性があり、われわれの意識全体が必要としている非概念的な洞察力がたしかに備わっている。

こんなふうに想像しながら、わたしはふたたび地平線のほうに振り向く。われわれはしたがつて、此処で、精神の神祕的な不幸に見舞われている。というより、それは見かけ上のなんらかの襞であり、この世に現れるものの何らかの欠陥だ。それが、われわれに与えることのできる幸福をわれわれから奪つてしまつてゐるのである。あちらでは、小さな谷のより明瞭なかたちや、ある日、空で動けなくなつた雷のおかげで、あるいは、より含みのある言語、救済された伝統、われわれがもちあわせていない感情（わたしはそれを選ぶことができないし、選びたくもない）によつて、一つの民族が実在し、自分たちによく似た場所で、秘かに世界に君臨しているのだ……。秘かに、というのも、われわれが宇宙について知つてゐることと真っ向から対立するようなものを、わたしはそこでもやはり何も思いつかないからだが。絶対的な國家や場所といふものは、われわれがその存在を夢見るためにはそれらを純粹なオゾンの壁で覆わなければならぬほど通常の条件から解放されているわけではない。此處でわれわれに欠けているものはごく僅かにすぎず、あちらの人々をわれわれから区別するものはおそらく、単純なしぐさや單語のほとんど気づかれることもない程度の奇妙さだけであり、それらはわれわれの隣人が彼らと交際していく掘り下げようとしたことすらないものなのだ。われわれがもつとも見過ごしてしまふものは、いつでも明証性ではないだろうか？しかし、もしも偶然この道がわたしに開かれたなら、わたしはおそらく理解できるのだが。

これが、十字路、あるいはその少し先で、わたしが夢見ることである。その結果、別の場所であり、そうでありつづけるものが、それにもかかわらず、ある種の強度さえもつて立ち現れるという印象を助長し



ある日、空で動けなくなった雷のおかげで……(p. 12)